

## 聞き取り調査の抄録

### ● 高台に逃げる

岩手県内の 3 地域（大槌町・釜石市・宮古市）婦人防火クラブ（以下婦防）の 50 代から 60 代のリーダー 11 名の東日本大震災「被災体験」は、明治三陸海岸大津波からの言い伝え「津波てんでんこ」そのままの、「地震が発生したらすぐに避難」「津波の時は窓や玄関などの開口部を開け、火を消して逃げろ」「海から遠くでなく、高いところに逃げろ」「一度逃げたら数時間はそこで待機する」を実践、即行動を起こした。そして、近隣に声を掛け合いながら高台に移動し、状況を判断し安全な場所ならばそこに留まることで、自分の命を助けることができた、と証言した。

大槌町 1 名、釜石市 4 名の婦防の自宅が流出、漁業の再開不安などの甚大な被災の中で、同居家族は失わなかった方々である。しかし、親類縁者・近所の仲間・知人などが犠牲となり、ふるさとの多くの資源を失った悲しみの中に身を置いている。自らも被災者でありながら、地元で根付く「困っている人がいれば助け合う」精神の実践活動であった。

### ● 炊き出し始動は早かった

避難所での支援活動の中心は「炊き出し」。発生直後、自衛隊などの公的機関などによる支援が入る前、被災直後の婦防の迅速な行動は日頃の訓練・研修の賜物だ。婦防内の支援体制を早急に組織し、地元の他団体、住民を巻き込んだ自発的な活動があった。

地域内で婦防の存在は認知されているので、他団体や地域住民の協力体制が整うのは、時間を要しなかった。3 月 11 日の被災直後から、可能なネットワーク機能を発動し、知恵を出し合い炊き出しは行われた。地元住民からの食材提供を受け、温かい炊き出しを提供。家庭料理を中心とする心づくしの炊き出しは、避難所被災者に喜ばれ、被災による傷ついた心を慰めた。

炊き出し内容は、避難所の環境や食材供出状況などさまざまであったが、停電でストッカーが機能不全となったために保存食料が豊富に集まり、沿岸部では食材に不自由しなかった。

また、担当する避難所以外にも炊き出しのおにぎりを配るなど、自主的な活動範囲は広がっていた。

## ● 避難所被災者との人間関係

避難所収容日時が経過すると、被災者への対応、いわば人間関係のコミュニケーションの難しさが表出してくる。当初は被災者の心痛を思いやり、また遠慮させてはいけないと、上げ膳・据え膳の炊き出しをしていたが、自宅は流され家族も行方不明だという被災者意識が積み重なり、自分勝手な要望や面倒見てくれるのが当たり前といった態度の被災者も出てきた。

炊き出しはカフェテリア方式、トイレ掃除は被災者が行うなど、避難所生活での協力と自立を促す話し合いを行い、秩序ある集団生活への体制を整わせるべく、まとめ役としての活動もあった。状況に応じて支援内容も変化していく。

避難されている高齢者は動かず寝たままになるので高齢者への心配りもする。遊び場のない子どもの対応もするなど、避難所という集団生活支援は、さまざまな切り口からのサポートが必要だった。心を閉ざして何もしない被災者に対応するのは、ユーモアが大事との発言もあった。炊き出し期間は数日で終了しあとは被災者の自主管理に移行した避難所もあれば、4ヶ月におよんだ避難所もある。支援は各避難所の状況によりバラバラであった。

避難所内の世話役として母性的な温かく包み込むような支援が提供できたのは、一途に彼女たちの共助の精神と、地域共同体の絆の強さである。自身も被災者であるにも関わらずの行動には感服する他ない。

## ● 多岐に及んだ被災者支援

支援物資の供給が始まると、避難所だけでなく地域内の在宅避難者への物資配布などを開始。数の揃わない物資を分配するには、理由を説明することで納得を得て、不満が出ないように配慮。また住民の家族構成を熟知しているので、必要なものを必要とする人への物資配布がスムーズに行えた。

各種のボランティアの訪問を受け入れ、在宅避難者へもボランティアを派遣するなどの配慮も怠りなかった。

地域内にある避難所をめぐり、被災者の安否情報提供に走り回った。ここでも住民の「顔と名前を知っている」婦防ならではの、きめ細かい対応が功を奏した。

震災前、婦防は消防団の後方支援として地域に認識されていたが、適切で機動力のある避難者の支援活動を実現したので、地域内での評価は高まった。

## ● 避難所による支援格差など

地域の小中学校は避難所指定がなされている。しかし学校長の権限で避難所としての利用の範囲が決められてしまう。校庭での焚き火、調理室の利用、学校長自らの応援があり、多くの支援者が気持ちよく活動できた避難所と、学校設備の使用を許可しない避難所もあった。また避難所被災者と在宅避難者では、受ける支援に格差が生じた地域もある。

地域内には、避難所といっても単なる集合広場だけのところもある。避難者の収容

可能な建物と設備の整った避難所が要望される。

### ● 強化したい避難訓練・防災意識の啓蒙

震災前の避難訓練は行事化していたと指摘する。婦防では災害避難マップ作成、災害弱者への支援等の施策を懸案中であった。今後は震災を大きな体験として住民の災害意識喚起と避難準備の啓蒙、そして、婦防リーダーの後継者育成が不可欠である。また、火急の災害時における役割分担には周到な準備をしてクラブ内の結束と連携の維持強化が必要との意見が出された。

### ● 地域の伝承を守る

地域の防災力は、イコール地域のコミュニティ力である。幸い、地域住民のネットワークが伝統的に強い地域であることが、円滑な支援活動を支えた。自助・共助の精神は、婦防リーダーの使命感として機能した。

### ● 近隣の人と同じ仮設暮らし

自宅を流された出席者は、現在仮設住宅で暮らしている。近隣住民と同じ仮設なので、その点は良かったとするものの、4畳半2間では狭くて、家族が多いと暮らし難い。独居の場合などは、心的ストレスからうつ状態になった人もいる。

漁港の壊滅で漁業再開は未定の状態なので、心配事も多い状況だ。

### ● 高齢化・過疎化・後継者問題が課題

現在、連絡のとれない会員もいる。また、居住地がバラバラに散らばってしまったために会員の集合ができない状態である。仮設住まいの人も多いので、どのように再結成していくかが課題だ。

婦防への加入が原則の地域であるが、会員の高齢化、次世代の地元離れ、後継者の嫁不足などが、後継者育成に大きな影響を及ぼしつつある。

また、婦人消防協力隊と婦人防火クラブとの融合にリーダーが腐心する状況もある。

### ● 津波の経験を伝えたい

出席者は今回の支援活動について、自身の精神を鍛える貴重な経験となったと語る。今後は、被災体験を伝承することに加え、防災意識の啓蒙、後継者育成に取り組みたいと抱負を述べた。